

Knowledge from water, knowledge from the nature.
The important things for our future.



ミズミライ

MizuMirai

水の未来を育む。2025 セディア財団活動報告書 Vol.11

水が未来への
手紙となる時。

南極の氷の声を聴く。
地球の記憶を呼び覚ます。

公益財団法人 セディア財団

さあ、
水について
一緒に
話し合い
ましょう。



これまでも、そしてこれからも、
セディア財団は持続可能な未来への取り組みを応援していきます。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



公益財団法人 セディア財団

〒100-0004
東京都千代田区大手町1-3-2 経団連会館12F
Tel.03-6478-1341 Fax.050-3535-9408
<https://www.sedia-found.org>



南極の氷の声を聴く。地球の記憶を呼び覚ます。

水が未来への手紙となる時。

To hear the voice of Antarctic ice is to awaken the Earth's memory.
The moment when water becomes a letter to the future.

水はただの資源でも、生命を潤す存在だけでもありません。
一滴の水には、太古から続く地球の記憶が宿っています。

富士山周辺の湧き水は何十年もかかって湧き出てくるといいます。
それがわかるのは、雨が落ちる間に触れた当時の空気が
原子となってその水に宿っているからです。

南極や北極の氷には、
何十万年前の地球の情報が保存されているといえます。

氷に眠る空気は、数十万年前の風を今に伝え、
融けゆく氷は、これからの地球の姿を静かに語ります。
まさにそれは、過去から未来への手紙のようなものかもしれません。

水のメッセージを読み解き、それを未来へ活かす。

その最前線の取り組みを知りたくて、
国立極地研究所副所長で北極観測センター特任教授の榎本浩之教授を訪ねました。
そして南極の氷が教えてくれることや、
未来への役立て方などについてお伺いしてきました。

南極は地球の過去を保存したタイムカプセル。氷床には何十万年以上にわたる気候変動が、南極で見つかる隕石には太陽系の起源と生い立ちが、そして氷床下に横たわる岩盤には地球の変動の痕跡が保存されています。その調査に今日も観測隊は南極を進みます。

画像提供：国立極地研究所

今、南極で起きていること。

融けるから崩壊するへ。

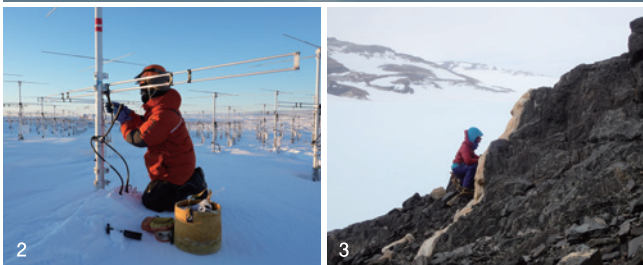
融けた氷の水と
暖かい海水によって、
氷がどんどん
剥がれていく
可能性がある。

国立極地研究所は、日本における南極・北極研究の中心の拠点。その活動について、副所長でもある榎本浩之北極観測センター特任教授（以下、特任教授）はこう説明します。「観測隊の派遣や、現地での調査を通じて、氷や大気、地質や生態系など、多方面から極地を調べています。さらに人工衛星を活用した遠隔観測や、国際的な研究機関との共同プロジェクトも進められています。極地研究は単なる学術的探究にとどまらず、未来の地球の気候システムを理解するための最前線です」。

昨今、地球温暖化による北極や南極の氷の減少が問題と

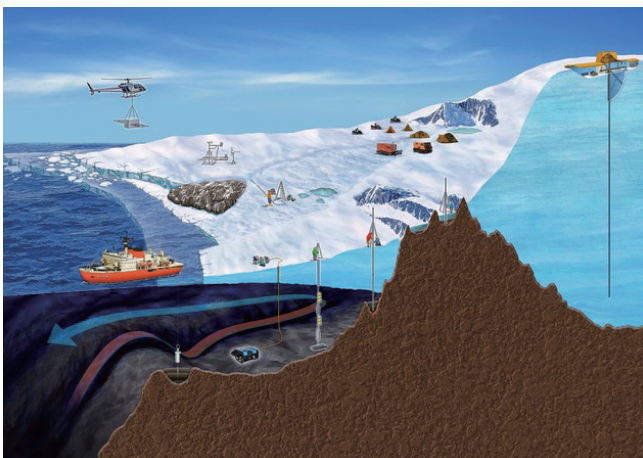


大気中の二酸化炭素（CO₂）濃度はこれまでにない速度で増加している。気候変動対策を取らなかった場合、2100年には世界の平均気温が現在より4℃近く上昇し、南極やグリーンランドの氷床が大規模に融解して、平均海面は最大1m以上、2300年には5m以上の上昇が予測されている。



- 1) 南極氷床上的の積雪粒径の調査。雪の粒の大きさ（粒径）は、日射の反射率を左右する重要な指標だ。
- 2) 南極の昭和基地の大型大気レーダーの保全作業。大型大気レーダーは、対流圏から電離圏までの大気の鉛直風、電子密度、温度などを高解像度で観測するために使用されている。
- 3) 南極のセール・ロンダーネ山地の地質調査風景。

※画像提供：国立極地研究所



地球温暖化による気温や海水温度の上昇に対して、南極大陸の氷床がどのように、そしてどの程度融け出すのかを詳しく解明するために、南極観測隊は暖かい海水が氷床の下に流れ込んで、氷床を下から融かすメカニズムを調べる観測に挑戦している。※図提供：国立極地研究所・イラスト：木下真一郎

なっています。最近では新たな課題も発見されたと榎本特任教授は言います。「氷の融解は表面が融けて、川となり、海に流れ込むものと考えられていました。しかしそれは一部に過ぎないことがここ数十年の調査でわかり始めてきました。融解した水が氷床の亀裂に入って、数百メートルもの氷の底に流れ込み、その水が潤滑剤のような役割を果たして、上にある巨大な氷床全体を滑らせているのです。つまり氷は水になる前に、氷のまま、海に崩れ落ちるのです。さらに南極では、暖かい海水が氷の下に潜り込み、下から氷を融解させる現象も確認されてきました」。さらに榎本特任教授はこう続けます。「2021年のIPCC（気候変動に関する政府間パネル）の報告書では、従来の海面上昇予測に加えて、まったくスケールの違う海面上昇予測が追加されました。氷床が海に流れ出し、浮かびだした氷の下からの融解が本格的に起きた場合に、海面が急激に上昇する可能性があります」。IPCCは通常、予測を裏付けるデータが揃ってから公開しますが、まだデータが少ないうちから発表したのは、問題の緊急性と重大さを物語っていると言えるでしょう。



南極から掘削して、国立極地研究所で保管されている、約6千年前と約70万年前の水柱。現在100万年前の水柱を掘削する取り組みが行われている。



掘削した水柱を管理する様子。南極の昭和基地から約1千km離れた所にあるドームふじ観測拠点Ⅱにて。富士山と標高が近いドームふじに建設されたのでその名がついた。※画像提供：国立極地研究所

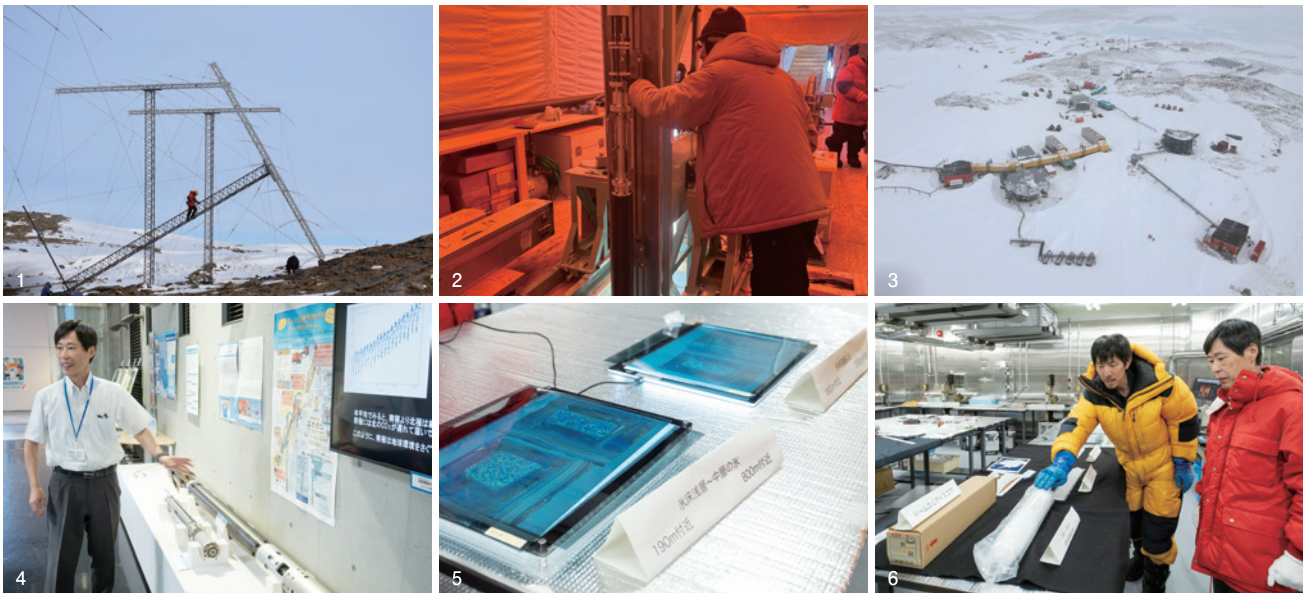
地球の記憶が
目覚める音を聴く。

その氷は、地球の記憶。

南極の水は地球の記憶が
保存されたタイムカプセル。
急激な気候変動や温度変化が地球全体に
与えた情報が詰まっている。

榎本特任教授が「国立極地研究所の南極・北極科学館」を案内してくださった時のことです。南極の水を見せてくださいました。「耳を近づけてください。パチ、パチという音が聞こえますね。この音こそ氷に詰まった気泡が弾ける音。何万年前の記憶が現在に解き放たれる瞬間です」と言い、「雪が降り積もり、何十万年もの時をかけて圧縮されると氷床が形成されます。その氷床には時代ごとの環境情報が層となって残されます。その氷柱を掘削して持ち帰り、分析することで、木の年輪のように「層」「層」がその時代の証言者になってくれるのです」と説明してくれました。

ます。この層の一つひとつが当時の地球の記憶。気泡からは当時の二酸化炭素濃度が、融けた水の原子を調べることで雪が積もった時代の気温がわかります。さらに原子や分子の成分を分析すると火山噴火の影響、大気中の微粒子の組成までも知ることができます。それを俯瞰することで、地球が過去に何度も急激な気候変動を経験してきたという事実、そして氷期と間氷期のサイクルや温度変化が地球全体に与えた影響が読み取れます」と榎本特任教授は言います。「南極の『ドームふじ基地』において、1千年前、1万年前、10万年前と古い情報を読み取り、最終的に70万年前まで読み取ることに成功しています。現在は地球の気候システムが大きく変化したとされる100万年前の情報を得るため、さらに古い氷床コアの掘削プロジェクトが進行中です」と現在の取り組みも教えてくれました。



1) 南極の昭和基地近くにはさまざまなレーダーが設置されている。2) ドームふじ観測拠点Ⅱ内部の深層掘削孔から氷を掘削する様子。3) 昭和基地の全景。4) 国立極地研究所の南極・北極科学館で実際の掘削機について説明くださる榎本特任教授。5) 南極の水を解析して、そこに詰まっている情報を読み取る。6) 研究室の室内温度はマイナスに設定されている。室内といえども防寒着は必需品だ。※1)～3)の画像提供：国立極地研究所

よりよい未来づくりへの活用。

そして水は 未来への手紙へ。

過去の事実を基盤にした予測は、
よりよい未来の環境づくりに向けた
確かな道しるべになる。

南極の水には過去の地球の情報が詰まっています。では、それを未来へ活かすのはどのような取り組みからでしょうか？榎本特任教授はこう教えてくれます。「地球の記録は未来を予測するための重要な手がかりになります。数十万年にわたる気候の変化を知ること、現在の地球温暖化がどのような異常性を持つのかを比較検討することができます。また、過去のデータは今後の気候シミュレーションの精度向上に役立ちます。実際に国立極地研究所は氷から読み取った過去の気候変動の詳細な記録を基に、海面上昇の影響や地球温暖化の進行の予測精度を上げるためのデータを各機関へ提供しています。また、気象庁、国立環境研究所、大学の研究チーム、さらには国際的な極地観測ネットワークとも協力し、より包括的な気候モデルを更新し

続けています。人工衛星やスーパーコンピュータを駆使して、次の数十年、数百年にわたる気候変化を予測する取り組みは、人類の未来に直結するもの。だからこそ地球の記憶を未来へ活かすことはとても重要だと考えています」。

水や水が語るメッセージは、決して悲観的な警告だけではなくありません。むしろ私たちがどのように行動すれば未来をよりよい方向に導けるか、そのヒントが隠されています。予測精度が高まれば、異常気象に備えた防災体制を強化することができ、農業や水資源管理にも活用できるでしょう。その積み重ねは持続可能な未来の環境づくりに役立ちます。そう思うと水はまさに未来への手紙。大切なのはそれをどのように読み取り、どのように活かすかにあるのだと改めて教えていただきました。



- 1) 南極の高台から水の大地を見渡す。
 - 2) 海底の泥を採取し、過去の海洋環境を探る。
 - 3・4) 南極大陸の動物たち。南極に生息する生き物は南極の環境変動に敏感に反応するため、生き物の調査は非常に重要だという。
- ※1)・2)の画像提供：国立極地研究所

— 教授紹介 —



榎本 浩之さん

国立極地研究所副所長・北極観測センター特任教授。専門は雪氷学、気候学、リモートセンシング工学。北海道大学にて学士取得後、筑波大学で修士号、スイス連邦チューリヒ工科大学で博士号を取得。北極、南極、パタゴニア、アラスカ、スヴァールバル諸島などの雪氷圏で幅広い研究を行う。

南極では、高度10km以上の成層圏でオゾンホールが観測され、中間圏では極中間圏雲(夜光雲)、さらに上層の熱圏ではオーロラなど、特異な大気現象が多く見られる。高度100kmまでの大気は、上昇・下降を伴う地球規模の循環をしており、地球環境に大きな影響を与える。この動きのメカニズムや変化を観測することによって、気象予報や気象予測モデルの精度向上に貢献している。

新潟の歴史や文化を、 アートを通じて再確認する。

米所として、酒所として名高い新潟県。そのなかでも日本海に面し、信濃川と阿賀野川という二大河川を抱える新潟市は、古くから「水と土」によって形づくられてきました。肥沃な土壌は稲作文化を支え、豊かな水系は暮らしや産業の源泉となってきました。その一方で、水害や地震といった自然災害とも向き合いながら、人々は自然と共生する知恵を育んできました。この土地固有の歴史や文化を、芸術という切り口で表現しようと始まったのが「水と土の芸術祭」。行政から民間へ、「みずとつちの芸術祭」と名称を変更しながらも受け継がれた都市型芸術祭について、その誕生からこれからの展望について、運営に携わってきた小川弘幸さんと平岩史行さんにお聞きしました。



上)「水と土の芸術祭2012」の、台湾のアーティスト王文志の作品『浴火鳳凰』。
下)「みずとつちの芸術祭」の会場で作品を真剣に見つめる小学生。

新潟市の日常を 芸術のまなざしで 見つめ直す。

「新潟市は、2000年と2005年に行われた平成の大合併で広域化し、新しい都市イメージを確立する機運が高まりました。新潟市は信濃川と阿賀野川という二大河川に育まれた町。その歴史や文化を「水と土」をテーマにアートで発信しようと始まったのが「水と土の芸術祭」。2009年に第1回を開催。以降は3年に1度開催してきました」と話すのは、立ち上げ時から運営に携わってきた、新潟市芸術創造村・国際青少年センター「ゆいぽーと」副館長兼統括ディレクターの小川弘幸さん。新潟には先行して、十日町市で3年に1度開催されている「大地の芸術祭」があります。小川さんは違いについてこう語ります。「『大地の芸術祭』は里山を舞台にしている、「人間は自然に内包される」という理念があります。一方、『水と土の芸術祭』は潟や河川敷、海岸など水辺空間をはじめ、市内の日常を舞台にしています。商店街や公共施設など、生活に直結する場所でアートが展開されるため、市民が主体的に関われる点

がポイント。観光型というより『生活に根差す芸術祭』。自分たちの暮らしや土地を、芸術を通じて、新しい視点で見直すことにつなげたいという狙いがあります」。

行政から民間へ。 市民参加型の 芸術祭をめざして。

行政が主導して始まった「水と土の芸術祭」は2009年から4回開催されました。同時に、どのように持続させるかという課題に直面。その他のさまざまな理由で2018年に幕を閉じることになりました。しかしその後、市民やNPO団体が中心となった、市民主導の芸術祭をめざす活動として引き継がれます。そのきっかけを、現在の「みずとつちの芸術祭」実行委員であり、総合ディレクターの平岩史行さんはこう教えてくれます。「開会式で、当時、副実行委員長だった私が挨拶をする事になりました。本当は終了を宣言するつもりだったのですが、市民の方々のがんばる姿や期待を思い出すと『市民主導でこの芸術祭を続けたい』と宣言してしまったのです。突発的な発言でしたが、よく言ってくれたと賛同してくれる人が

みずとつちの
芸術祭が伝えること。

水と土

新潟の美しい風景。冬の阿賀野川と五頭連峰。



6) 風景画像にイラストをプラス。自然とアートを融合するという「みずとつちの芸術祭」のコンセプトを象徴する画像。7) 「In the water ～眠る潟を呼び覚まして～」新潟にある潟のサイズを計測して、同じ縮尺で箱を作ると共に、その潟の写真を箱に貼り、土と水を入れた作品。8) 土の恵みである米が実る。新潟は日本を代表する米所。9) 新潟を流れる信濃川。10) 「水と土の芸術祭」の立ち上げに関わった人、新潟市芸術創造村・国際青少年センター「ゆいぽーと」副館長兼統括ディレクターの小川弘幸さん(左)と、「みずとつちの芸術祭」へと引き継いだ人、総合ディレクターの平岩史行さん(右)。

1) 「水と土の芸術祭2009」の「こどもプロジェクト2009」による作品、「清五郎開拓八人衆」。2) 「みずとつちの芸術祭」の室内展示。窓も立派なキャンバスになる。3) 「水と土の芸術祭2015」の屋外展示。アーティストの大矢りかの「田舟で漕ぎ出す」という作品。4) 「にゅう潟に生息しているかもしれない動物」。青葉公園に設置されていたコンクリートの動物たちをアーティストの松島菜月がペインティングした。「にゅう潟」は架空の潟を表す造語。5) 「天上界を映し出す鏡」。アーティストの松島菜月が、山の下神明宮のご祭神がいる世界を表現。

みずとつちの芸術祭

「みずとつちの芸術祭」は、新潟市の豊かな水辺環境と土壌文化をテーマに、市民とアーティストが協働する地域密着型の芸術祭。2009年に「水と土の芸術祭」の名称で始まり、2020年に「みずとつちの芸術祭」に名称を変更。行政主導から民間主導へと移り、暮らしの場を舞台にした作品や参加型プログラムなどで、地域の歴史と文化の継承を未来へ結びつけています。



主導への転換は、単なる運営形態の変化ではなく、芸術祭の意義そのものを広げるものになっていきました。新潟市民が主体的に関わることで、多様なアイデアや柔軟な企画、何より規模は小さくても、新潟ならではの企画や取り組みが行えるようになり、新しい可能性が拓かれました。まさに、市民が育てる芸術祭としての進化が始まったのです」と笑顔で言います。これまではさまざまなプロジェクトが生まれてきました。空き家や古民家を再生し、アーティストが実際に滞在して制作を行い、地域住民がサポートする空き家プロジェクト。また、米や発酵文化をテーマにアーティストと料理人が共演し、新潟ならではの「水」と「土」の恵み

を、食を通じて味わう体験プロジェクトなど。その数々は、水と土をテーマに、人と土地をつなぎ直す体験の場としての独自性を築くことにつながっています。今後の展望について平岩さんはこう語ります。「市民がもっと自発的に参加する芸術祭をめざしたいですね。ゴールがあるとすれば、地域の人々が主体的に文化を創造し、独自の祭りを作り上げることです」。有名や無名とか、規模が大きいか小さいではなく、アートを通じて新潟市民が自分たちの土地の歴史や文化を知る機会となるだけでなく、持続可能な形で地域の魅力を発信できること。「みずとつちの芸術祭」はそんな魅力的なアートの祭典へと着実に成長しています。

地域に根付いた 芸術祭のカタチを 未来へ。

「みずとつちの芸術祭」は、アーティストと市民、そしてアートと日常の距離がとても近いことが大きな特長です。「アーティストが市内を自由に歩いて、空き家やカフェなどを自ら会場に選ぶことがあります。市民サ

たくさん現れて、引くに引けず続ける道を探し始めました」。本場に市民主導でできるのだろうか？やがて世の中はコロナ禍となります。イベントはのきなみ自粛。平岩さんは新しいカタチを模索しなければならなくなりました。「バーチャルで行うこと。大規模でなくてもいいから、市民の参加を募ること。コンセプトは継承しながら、従来の形式にとらわれない新しい形をめざしました。そして2020年からは「仮想 みずとつちの芸術祭」としてスタート。継続はチカラです。コロナ禍で人々の気持ちが塞ぎ込む中、少しでもほっこりするようなイベントを提供できたらという想いで始めました」と平岩さんは言います。2020年以降は毎年開催。コロナ禍も明け、ここ数年は屋外での展示も復活。現在では、芸術祭期間中は地域住民自らが企画・実施する活動が活発に展開されています。

ポーターズ会議という組織があつて、アーティストの制作を手伝ったり、作品ガイドを作ったりと、市民の方々もさまざまな形で関わっています。この組織は、市民が主体的に芸術祭に参加し、地域の文化活動を支える重要な役割を果たしています」と小川さんが言えば、平岩さんは「市民

歴史と文化を 芸術で。



2024年11月14日に一次審査。同年12月10日に最終審査を渡辺パイプ株式会社の本社において行いました。7名による審査委員が厳正に審査した結果、最優秀賞1作品、セディア財団特別賞1作品、優秀賞4作品、準優秀賞10作品、佳作21作品、努力賞64作品、そして学校優秀賞1校、学校賞5校を決定いたしました。入賞作品に関しては「入賞作品集」で紹介しています。ぜひ、ご覧ください。

今回、最優秀賞に輝いたのは、星野学園小学校4年生（2025年現在5年生）の森山栄治さん。※2025年現在5年生

最優秀賞は、星野学園小学校4年生の森山栄治さん。

審査委員長
総評
澤井 陽介

今回の応募作品の中には、施設の見学、水質調査、聞き取り調査など具体的な体験を伴う活動をまとめたものも多く、主体的に探究活動を進めている様子がわかります。また、かべ新聞という特徴を活かして、見出しを工夫したり、写真やイラスト、ランキングデータなどを盛り込んで楽しくレイアウトしたりして、読み手を引き付けているものも多く、作品の質が年々向上しているコンテストになってきています。



作品の趣旨を説明する森山栄治さん

星野学園小学校（埼玉県）で行われた表彰式の様子



最優秀賞を受賞した星野学園小学校の森山栄治さんの様子



第10回 セディア財団全国小学生
「わたしたちのくらしと水」かべ新聞コンテスト2024

作品集をご覧ください

小学生が大切な水について調べてまとめたかべ新聞の入賞作品が、今回も1冊の冊子にまとまりました。4,766作品の中から最優秀賞をはじめ、上位入賞作品を掲載。どれも力作揃いです。ぜひ、子どもたちの水への想いをご覧ください。

[セディア財団のホームページよりご覧ください]
https://www.sedia-found.org/contest_newspaper/award.html



第10回セディア財団 全国小学生
「わたしたちのくらしと水」
かべ新聞コンテスト2024
入賞作品発表！ 全国の小学校177校から4,766もの作品のご応募、ありがとうございました。

体験したり、しっかり取材したことを自分なりに解釈し、まとめた作品が多くなった、有意義なコンテストになりました。

くらしと水の関係について、そして水について考えることは、私たちの未来について考えることです。だからこそ未来を担う子どもたちに考える場を提供したいとの想いからスタートした「セディア財団全国小学生『わたしたちのくらしと水』かべ新聞コンテスト」。記念すべき10回目となった今回は、全国の小学校177校から、4,766作品もの力作が寄せられました。共同制作の作品もあるため、制作に携わった児童は5,083名にも上ります。今回は、「くらしと水」というテーマを幅広く捉えた自由研究作品が多く、また、「飲料水」という枠にとどまらず、くらし全体に関わる水の役割について研究した作品が多かったのが特長です。子どもたちの水に対する関心の高さが伝わる素晴らしいコンテストになりました。



[受賞された星野学園小学校（埼玉県）の皆さん。右から最優秀賞 森山栄治さん、準優秀賞 前田志穂架さん、努力賞 浅見空花さん、飯野福也さん、青木翠一乃さん]

入賞作品が決定！

農業を学ぶ全国の高校生から779作品のご応募をいただきました！



公益財団法人セディア財団主催

第9回 高校生が描く

明日の農業 コンテスト

明日の農業を考えよう！

今回も、全国の高校生から明日の農業を元気にする提案がたくさん寄せられました。

高校生の真剣で、希望に溢れる提案は、農業の未来を考えるきっかけを与えてくれる力作揃いでした。



これからの農業は、どの

ようにすれば持続可能で発展的な産業になるのか。

夢のある産業になって、若い人たちの注目を集め、心を動かすことができるのか。

「高校生が描く『明日の農業コンテスト』」は、全国の農業や農業関連産業について学ぶ高校生の皆さんが日々の学びの中から生まれたアイデアをまとめ、農業の未来を描いてもらいたいという想いで2017年にスタートしました。第9回となる今回も、「わたしはこんな方法で農業を元気にする」というテーマで全国の高校生の皆さんにアイデアを募り、全国31校から779点もの素晴らしい作品をご応募いただきました。高校生の皆さん、そしてご指導いただいた先生の方々に改めて心より

御礼申し上げます。

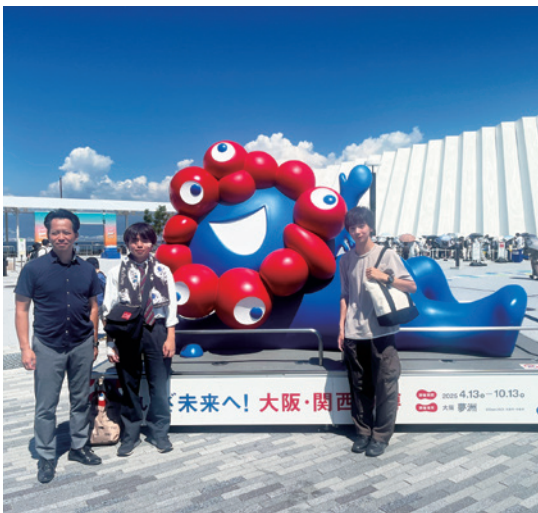
2025年6月5日に一次審査会を実施し、応募作品を慎重に絞り込み、最終審査会へのノミネート作品24点を選出。同年7月3日の最終審査会で、セディア財団賞4作品（最優秀賞1作品・金賞3作品）、銀賞5作品、銅賞10作品、学校奨励賞2校を選定いたしました。

御礼申し上げます。



セディア財団賞受賞者への副賞は、万博で盛り上がる大阪への旅。

大阪研修旅行



「大阪・関西万博2025」での記念撮影。左から、京都府立桂高等学校 清水毅夫教諭、濱脇 一桜さん、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 野田峻佑さん

今回は渡辺パイプ関西支社で表彰式を行った後、大阪を代表する繁華街、なんば周辺を観光。翌日は多くの来場者で賑わいを見せた「大阪・関西万博2025」へ。今回は暮らしや都市のあり方を体験を通して学べる「未来の都市パビリオン」や、素材・水・循環・をテーマにした展示が展開されている「日本館」を訪問。AIや藻類活用など、最先端技術と人の知恵が融合した展示を通じて、持続可能な社会の構想に触れることができました。最終日は「ハイコムスマートファーム 泉佐野ファクトリー（大阪府泉佐野市）へ。完全人工光型の植物工場と、AIやIoTを活用したスマート農業の最前線を見学。楽しさと学びがたくさんつまった大阪研修旅行を満喫していただきました。



第10回 高校生が描く「明日の農業コンテスト」作品大募集！ 応募締切り 2026年4月15日（水）

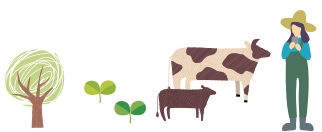
わたしたちが暮らす上で欠かすことの出来ない「農業」は、どうすれば持続可能で発展的な産業になるのか。農業や農業関連産業について学ぶ全国の高校生の皆さんの日々の学びの中から、「自分ならこうする!」と考えた農業に関するあらゆるアイデアをまとめたレポートを募集しています。

〔詳しくは、セディア財団のホームページをご覧ください〕 https://www.sedia-found.org/contest_farming/



セディア財団賞最優秀賞に輝いた、北海道真狩高等学校3年生の山崎遥斗さん

セディア財団賞最優秀賞に輝いたのは、北海道真狩高等学校3年生の山崎遥斗さん。





自然の生きものに興味を持つ。見つめる。観察する。それは人と自然がつながる第一歩。そこから発見した学びや感動は、自然と人の共生を自発的に考えるきっかけになります。そんな一瞬を、写真を通して表現してもらいたい。小学生、中学生、高校生の若い感性で生きものたちの一瞬のワンダーを切り撮ってもらいたい。そんな想いを込めて開催しているのが、セディア財団が主催する「生きもの写真リトルリーグ」です。

「生きもの写真リトルリーグ」は「生きもの」をテーマとした写真コンテストです。自然や生きものに興味を持つ、全国の小学生・中学生・高校生を対象に、全国各地に暮らす生きものたちの魅力を表現した写真を募ってきました。2025年のコンテストには全国の小中高生186名から計440作品もの応募が寄せられ、応募者数・作品数ともに昨年を上回る結果となりました。「全体的に写真のレベルは非常に高く、被写体に対する豊富な知識に驚いた」という海野和男審査委員長の言葉の通り、2025年も力作揃いのコンテストになりました。

入賞作品発表！

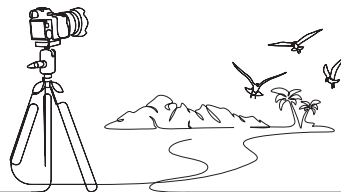
全国の小中高生186名から計440作品もの応募をいただきました。ありがとうございました。

生き生きとした生きものの
一瞬を切り撮って、
人と自然の共生を考える
きっかけにしてほしい。

おめでとうございます。
最優秀作品賞（セディア財団賞）は、
神奈川県立川和高等学校3年生
小野壮太さんの「孤高の散華」。

応募数も増え、作品も多様になってきた「生きもの写真リトルリーグ」。予選審査を行い、最終審査会への進出作品を小・中・高それぞれ3点ずつ、計9点を選出しました。そして8月2日、市立小諸高原美術館で最終審査会を行い、最優秀作品賞（セディア財団賞）1作品、優秀作品賞3作品（小中高生各1作品）、小諸市長賞1作品、入選4作品を決定しました。

最優秀作品賞（セディア財団賞）に選ばれたのは、神奈川県立川和高等学校3年生の小野壮太さん。作品タイトルは「孤高の散華」。印象的なショットでハチの概念を覆し、人間が抱く「ハチ＝悪」という偏見を、土足で蹂躪する構図で見事に風刺。「一般的なハチ像への違和感を、ストーリーのある4枚の写真で美しく表現している」と審査員からも高く評価されました。その他の作品も自然と生きものの一瞬を美しく写した力作揃いで、若い感性の発露に審査員一同大きな感動を得たコンテストになりました。その数々の力作を作品集にまとめています。ぜひ、ご覧ください。



最優秀作品賞（セディア財団賞）を受賞した
小野壮太さんの作品

孤高の散華



審査委員長総評

〔審査委員長〕海野和男

年々写真のレベルは高まっており、今回は特に激戦となりました。昨年同様に野鳥の写真が多く、全体的にレベルの高さが印象的でした。また、生きものサミットでは、入賞者の被写体に対する豊富な知識に大いに驚かされました。生きもの写真の子どもの頃から撮ることで、これからの地球環境を身近なところから考える子どもたちが育つことを願っています。

生きもの写真リトルリーグ
2025年

受賞作品集

全国の小中高生が自然や生きものたちの魅力を写し撮った力作の数々を1冊の作品集にまとめました。若い感性が切り取った、自然と生きものの一瞬のワンダーの数々、ぜひご覧ください！

〔セディア財団のホームページよりご覧ください〕

https://www.sedia-found.org/contest_photo/award.html

